

## 中央教育審議会大学分科会（平成 26 年 6 月 23 日）における主な意見等

- 意欲、適性という部分については、達成度テストによって多少でも測っていくのか、それともアドミッション・ポリシーに基づく個別の入試に任せるのか整理が必要。
- 学習指導要領の範囲での出題には限界があり、もっと多様な能力を評価できるような、もう少し科学的な方法を検討の対象にすべきではないかと思う。
- 大学の情報というものは、幾らでもネットで流すことができ、それは非常に大きなデータを大学にも与えるだろうし、学生自身がいろいろなことを知ることできる。情報提供も含め、もっと高大接続というのは様々な形があるのではないか。
- 大学入学者選抜の試験内容は、実際には初等中等、小学校・中学校にも影響している。PISA のデータで、日本に理科、数学でレベル 5 以上の生徒が何と 20 万人いる。20 万人というと、大学に毎年入る人たちが 60 万人ぐらいで、3 分の 1 はそれぐらいの生徒がいることになる。つまりレベル 5 の生徒たちが高校を経由する中で、ほとんど駄目にされてしまっていることになる。今、高大接続のためにかかなり具体的に様々な検討をされている一方で、様々な教育手段、新しい教育手段も開発されている。こういう様々な努力が生きるような形で今回の高大接続ということをもとめていただくとともに、少子高齢化の中で、教育の問題は是非手厚く検討していただきたい。
- 大学に関する情報はいまだ必ずしも十分に伝わっていない。その点は改善すべきところとして重要だと思う。小学校から大学までのつながり方が今、大きく転換しなければいけない時期に来ていると思う。4 年制大学進学者が 5 割を超えている中で、今の接続の仕方は、大衆化が進んでいる状況の中でできてきた入試体制、接続体制、あるいは高校教育の体制である。それに対してかなり基本的な考え方を考え直すということが求められている。実際に制度を変えるには、急いでも数年先にはなるが、それでも先進国全体と比べればかなり遅いペースのため、具体的に改革を進めていかなければいけない。  
非常に大きな問題の一つとして、入試の多様化がある。日本では一万数千件も入試が行われており、一つの大学で数百種類の試験を行っている大学もある。しかも、非常に少数の科目でもって試験を行っているケースもあり、高校での学習が非常に偏ってしまうという状況につながっている。  
二つ目として、教科が余りに細分されてきたということがある。高校生の多様化に対

し教科の多様化によって対応しようという政策の結果としてそれぞれの教科が独立してしまっている。知識をどのように使っていくか、教科を通じて作られる思考力、表現力は非常に重要である。そういった意味で教科観、学力観は大きく変えなければいけない。

三つ目として、多様化のために高校生の学習時間が非常に大きく減少している。日本の入試は入試地獄や形骸的な知識であると指摘されてきた一方、ある意味では学習の習慣を作ってきたことは事実。しかし、ここ十数年くらいに急速に緩んでおり、自分で勉強する習慣を失わせている。自分で考え直す時間を作るということは非常に重要で、そういう点をもう一回チェックする体制を作るという意味でこれは急がれている。これは決して延ばしてはいけないし、テクニカルな問題だけではないということを申し上げたい。

- 大学入学志願者に関する多面的な情報を活用して入学者を選抜することが求められる中で、各大学が個別の学力試験を行うことを想定したのでは今と変わらないのではないか。各大学の入学者選抜に関しては、多面的な情報を活用するということと、達成度テスト（発展レベル、基礎レベル）（仮称）の試験とうまく組み合わせることを求めるべきである。個別の大学の入試で何科目をやるということが入ると、結局今と何も変わらなくなるということになってしまうため、矛盾がないように検討してほしい。
- 達成度テスト（発展レベル）（仮称）について、合教科・科目型あるいは総合型を強調している一方、教科型をどこまで絞っていくのかということは明確になっていない。大学入学者選抜という高校 3 年生が真剣にかかわる問題について、試行錯誤的な形で世の中に出ていくと、高校側は相当混乱するのではないか。